

コリントの信徒への手紙一 15:12-22

「希望はキリストに」

2024年11月3日(主の日 召天者記念礼拝)

本日は、先に主に召された信仰の家族、信仰の友のことを覚えて礼拝をささげています。のちほど、召天者名簿にしたがってお名前を読み上げます。昨年から1年の間に主の御許に送りました一人の友の名前を加えまして56名の名簿となりました。故人のことを思い起こすためです。さまざまな思いを持ってお名前を聞くことになるかもしれません。けれども、わたしたちはここで亡くなった人を拝むために集まったわけではありません。ましてやここに一時魂のようなものが戻ってくる、というふうにも考えていません。今日の週報の礼拝順序を見ていただくとわかるかもしれませんが、今日の礼拝はいつもの礼拝と順序においては何も特別なことはありません。礼拝の中で、召天者の名前の読み上げが付け加えられただけ、とっていいものです。つまり、わたしたちが今行っていることは、あくまでも礼拝、毎週の礼拝と同じだということです。そして、礼拝でわたしたちは何をしているかといいますと、神を拝み、神を賛美しているのです。今、神のみもとで、先に召された友、家族が安らぎの中休んでいる。わたしたちはそのことを信じています。そして、故人を平安のうちにおいてくださる神をほめたたえる、そのような礼拝をおささげしているのです。主イエスに愛され、主イエスを愛した父、母、おじいちゃん、おばあちゃん、妻、夫、またこども、教会の友、みんなが愛した礼拝と同じ礼拝をこうして今日もささげることができるのは本当に大きな恵みです。

そこで、この礼拝をささげているわたしたちが、心確かにしなくてはならないことは、わたしたちの神は生きておられる。生きて働いておられる、ということです。生前、主イエスの救いを信じ、洗礼を受けて、罪を清められ、終わりの日には復活させられて、天の国へ入ることが約束された先に召された信仰者たちは、この約束が果たされるまで、間違いなく神のもとで平安のうちにおかれています。このことをわたしたちは、この礼拝でもう一度心確かにします。神は約束を守ってくださる方であり、今も故人たちと共にいてくださるし、その生きておられる神が、ここに集うわたしたちのためにも働いてくださる、このことを信じ、心確かに安心して礼拝をささげることができるのは恵みです。わたしたちが信じる神は死をも克服された神だからです。だからといって寂しい思いがなくなるわけではありません。逆に、亡くなってしまった人のことをすぐに忘れてしまう冷たさをもわたしたちは持っています。いつも、亡くなった人のことを覚えて生活するわけにはいけないという現実があるからです。しかし、生きておられるわたしたちの神は、そのことをも超えて働いてくださる。イエス・キリストは寂しさの中にいるわたしたちを、死を克服した先にある永遠の命の希望を持って慰めてくださり、また逆に、すでに眠りについた人たちのことを忘れてしまう、わたしたちの冷たさからも救ってくださいます。信仰とはわたしたちの感情をなだめるのではなく、寂しさをも包み込んでくれるより大きな存在であ

り、わたしたちが信じる神イエス・キリストは、死の前に無力であるわたしたちのために、絶望をもたらす死に対して怒り、また悲しみのうちにあるわたしたちとともに泣いてくださる神、その神を信じることです。

当然、礼拝をしたからといって、死んだ人が生き返るなどということはありません。わたしたち人間は死んでしまった人のことをどうすることもできないのです。死はわたしたちの前にいまだ立ちはだかっています。また、亡くなった人が今なにか不十分である、ということもありません。神の身許での平安は完全だからです。ですから、わたしたちが何かお供えをしたり、供養をしたりすることで、死後の生活があってそれがよいものになるなどということもありません。わたしたちは亡くなった人たちをイエス・キリストにお委ねしているのであり、この命の神である方が今はその命を預かってくださっていると信じています。この神を信頼し、感謝しているからこそ、こうして召天者記念の礼拝、神を賛美し祈る礼拝をおささげしているのです。先に亡くなった人たちは皆、イエス・キリストを救い主として信じる確かな信仰を持った信仰者として召されたのですから、故人が連なっていたこの藤沢北教会がこうして記念の礼拝をするのは、教会としての責任であり、ご遺族といっしょに、遺族の一員として、礼拝をささげることができ、神に目をむけることができるのは、大変幸いなことです。わたしたちが信じる平安は神によって確かであるからです。

礼拝についてもう一言大切なことを述べなくてはなりません。確かにわたしたちがここに集まり、このわたしが司式をして礼拝をささげています。けれども、礼拝の中心は神の言葉、御言葉です。今聞きました聖書の言葉、そしてその説き明かしてあるこの説教は、聖霊の力、神の力によって、単なる文章やわたしの解説ではなく、神の言葉になる、そうわたしたちは信じています。神の言葉になるとは、ここで語られたことが、救い主イエス・キリストを指し示し、また語られたことがイエス・キリストの御業となる、ということです。教会につらなります信仰者はみな、そう信じて聖書の言葉を聞いています。そして、主に召された家族、友のことを思うのにふさわしい慰めと希望が今日の聖書の箇所語られています。ひとことというならば、先に眠りについた人たちについてわたしたちは希望を持っている。死んだら終わりではない、そうではなく、キリストが来られるときに、その人達が復活してキリストが天の国に入れてくださる、ということです。

さきほどはお読みしませんでした。直前に今日の話の前提となる大切なことが語られているますので、大事なところだけお読みいたします。第15章1節からです。「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがた受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。……あなたがたはこの福音によって救われます。」先に眠りについた人たちもわたしたちも、この告げ知らされた福音を受け入れて生活のよりどころとしています。どのように生きるか、の土台としています。この福音によって生かされてきた、今も生かされており、そして救われるのです。その中身はなにかというと、3節にこうあります「最も大切なこととしてわ

たしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと……」キリストは十字架につけられて死なれ、墓に葬られましたが、復活なさいました。そして実際弟子たちの前に現れました。この主イエスの復活に基づいて、わたしたちもいつかは死ぬけれど、終わりの日、主イエスがふたたびきてくださる時に、復活させていただける、と信じているのです。わたしたちは、人が亡くなったことをよく「天国に行った」といいます。わたしたちキリスト教会ではこのことを真剣に信じています。厳密に言いますと、すでに話したように、天国に入るのは終わりの日がきた時です。さらに言うならば、「天国に行く」のではなく天国の方が「来る」と聖書には記されているのですけれど、今、なにかふわふわした雲の上のようなところが天国でそこにいる、とは考えていないのです。そういう意味では、「おじいちゃんは天国だ」、と言うとすると、終わりの日に天国に入ることが確定している、確かに天国に入ることができる、という意味と考えたほうがいいでしょう。ここで今日の御言葉と関係して大事なことは天国に入ると信じているのだから、復活も信じないと話がとおらない、ということです。天国では神のみもとで永遠に生きることになります。天国で死んでいるのではないのです。喜びのうちに神の御許に生きる、それが天国です。天国を信じるならば、わたしたちはこの終わりの日の救いの完成にあずかるために復活させられることも信じるのです。神が復活させてくださいます。わたしたちは真剣に、終わりの日に先に召された人もわたしたちも復活させてくださる、そして天の国に入れてもらえる、そう信じています。天国を信じるならば、復活も信じるのです。

ただ、なかなかそのことを頭で理解して信じるのは難しいのは確かで、今日の箇所のように、「死者の復活などない」、という人がこのコリントの教会があった1世紀、まだ始まったばかりの教会でもいたことがわかります。そして、これはこの後克服されたわけではなく、この後いつの時代にもあらわれ、今のわたしたちこそ信じきれていないことかもしれません。けれども、ここで語られていることは、先ほど読みました第15章の始めにあるように「キリストは復活なされた」ということは受け入れているわけです。主イエスは復活なされた、このことは大前提です。だからこうしてここに教会があり、信仰者がいるわけです。キリストが復活なされたのはある意味過去の出来事であって、わたしたちは目撃しなかったとしても、目撃した使徒たちから宣べ伝えられ教会が受け継いできた事実です。この手紙の著者パウロがわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです」といいましたが、わたしたちもそのことを受け継いでいるのです。そこで、キリストは復活なされたのに、死んでしまった信徒の復活はない、というのはおかしい、と語ります。細かい議論は今日はいたしません、もしキリストが復活しなかったのなら、わたしたちの信仰はむなしいものになってしまいます。その土台のすべてがなくなってしまうからです。17節では、「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります」と語られていますが、これは事実を逆し

て仮定として言っているのですから、事実は「キリストは復活なされたのですから、わたしたちの信仰はむなしくなどない、意味があり、わたしたちの罪は赦されている」。これが私たちの信仰であり現実なのです。

ここで語られているようにキリストの復活と私たちの復活とはわかちがたく結びついています。つまり、「神は終わりの日に私たちを復活させて下さるといふ御業、御心を行うためにキリストを復活させて下さった」、ということです。最初にキリストによって、神は復活はある、と示してください、その同じ事柄にわたしたちを与らせてくださるので、キリストの復活において示され約束されている私たちの復活にこそ、神が私たちに与えようとしておられる救いの完成なのです。礼拝で語られますキリストの復活を信じて、キリストを見れば、わたしたちの先に召された父親が、母親が、妻が、夫が、どのように天国に入るかわかるのです。キリストの復活にこそ、神が私たちに与えて下さろうとしている救いの完成が示されているからです。主イエスご自身の言葉を用いてひとことであるならば、神を愛し、人を愛する、その愛の平安の中に生きる、ということに尽きると思います。私たちはともすれば、神を愛し、人を愛すること、その土台である十字架や復活よりも、キリストの生涯に学び、その直接的な教えに従って生きることの方が大事だ、と考えることがあります。その方がわかりやすいからです。復活を信じなさいと言うよりも、弱い人に優しくしなさい、と言われた方がわかりやすい、自分にも少しはできるかもしれない、と思えるからです。けれども、先ほど聞きましたように、「最も大切なこと」として、つまり私たちの救いに不可欠なこととして宣べ伝えたのは、神の独り子イエス・キリストが私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、三日目に復活したこと、そして多くの人々に現れて下さったことです。キリストの十字架の死と復活においてこそ、神の御心が現されています。ここにこそ私たちの救いがあります。いつか必ず死んでいく私たちが、終わりの日に、復活の命と体を与えられる、それが神の救いの御業の完成です。そして神の御国に入れていただける。キリストの復活は、私たちにこの救いの完成を約束し、保証してくれています。おばあちゃんが、天国に行くのを信じるわたしたちはキリストの復活とおばあちゃんの復活を信じているのです。終わりの日に神はかならずわたしたちの家族を、そしてわたしたちを復活させてくださいます。ここにわたしたちの大きな希望があります。

高齢の時間を少し長くすごし、体にも不自由を覚えていたある教会員は、「早くイエス様のもとに行きたい」と折りにふれておっしゃるようになったのです。「そうですね」とはわたしもいえず、「それは神の御心におまかせしましょう」と話したのですが、「早くイエス様のところに行きたい」。それは確かに体のつらさもあったかもしれませんが。しかし、あきらかにそれは絶望の言葉ではありませんでした。主イエスのもとに行けるといふ希望の言葉でした。もしそれがなければ「早く死にたい」それだけであったはずで、そうではなく「イエス様のところに行きたい」とおっしゃったのです。終わりの日の復活を信じる信仰の言葉だった、とわたしは今でも信じています。ある人は、みとりの間家族の

家で過ごしていました。ある時、突然「わたしは罪を犯しました」と言い始めたのです。ご家族から連絡をもらって自宅を訪ね、聖書を読み「このようにイエス様が罪を赦してくださいました」とお話ししました。心にかかることがあったのでしょうか。あるいは人生を振り返って罪の歩みであったとしか思えなかったのかもかもしれません。そうであるならば、罪が赦されなければ悔いの残る人生だったということになってしまうでしょう。しかし、信仰によって、その人の罪はキリストによって赦された、と信じることができるのです。信仰者の幸いは、信仰というのは生きている間にいただくものであって、生きているあいだに神によって罪が赦されたと信じることができることです。罪をいつまでも後悔したり、逆に開き直ったり、見て見ぬふりをして生き、人生を終えるのではなく、確かに赦された者として歩むことができる、それが救いだと言える、それが信仰者の幸いの大きなものではないかと思います。それは、十字架によって赦された罪が、終わりの日にその赦しが確かに完成させられる、ということです。終わりの日にキリストの前に立たされた時に、罪を責められるのではなく、「あなたの罪はわたしが赦した。だからあなたは無罪だ」とキリストが言ってくださる。そう言ってくださる神を信じているのです。信仰において最も大切なことは、自分がどれほど立派であったか立派でなかったかということではなく、また、功績を残したか残せなかったとか、どれだけ有意義のものであったか、そうでなかったか、という評価をはるかに超えて、神が独り子主イエス・キリストをこの世に遣わして下さり、主イエスが私たちの罪のために十字架にかかって死んで下さり、そして復活された、その事実です。神が私たちの救いのために主イエスの十字架と復活を成し遂げて下さり、私たちの罪を赦し、復活の希望を与えて下さいました。罪がないのですから、永遠に生きることが許されるのです。この神の恵みのみ心の中に身を置くことが私たちの信仰です。そのことによって私たちは、どんな弱さや欠けを持っていても、失敗や挫折に苦しむことが多くても、罪を犯したとしても、そしてたとえ志半ばにして世を去らなければならないことになるとしても、復活の希望を抱いて、神が約束して下さっている救いの完成を望み見つつ歩むことができるのです。

先に人生を終えたわたしたちのおじいちゃん、おばあちゃん、おとうさん、おかあさん、むすこ、むすめ、妻、夫、家族、友達、みんなこの救いの確かさに生き、そして、今主のみもとでの安らぎの中、終わりの日の復活を希望として眠りについていきます。ここに信仰に生きる幸いがある、わたしは今日のみ言葉からたしかに、故人の希望と平安を聞くことができました。そして、地上をまだしばらく歩むように定められているわたしたちは、このことを受け取りましたから、宣べ伝えて、受け取ったように、これからも礼拝で宣べ伝え、受け継いでいくのです。ここに今日集まって一緒に礼拝をしたみなさんとぜひこの務めを一緒にしたいと思います。そして希望を持って歩みを続けていきましょう。